長谷の『おん田（お田植え祭り）』

毎年５月８日（旧暦では４月８日であった）長谷の八坂神社（牛頭天王社）では、ようか日の行事として「おん田（お田植え祭り）」が行なわれる。

当日各家々では、ヤマツツジのてんとう（天道）花を庭先に高く掲げて、編笠団子を作ってお供えして田の神様をお迎えし、お寺では、蓮華の花で屋根を飾ったお釈迦様をおまつりし、甘茶を沸かしてお釈迦様に供え、参詣者に振る舞う等のようか日の行事も残されている。

さて、おん田の行事は、村人が集いて神前で今年の五穀豊穣・豊年満作を祈願する神事の後、直会にお供えのお神酒を酌み交わし盛り上がり絶頂期に、当番役の馬子役と牛役の二人が面白可笑しく昔の田起こしから田植えまでを演じて、早乙女役の子供達が手植えした早苗のサカキ（榊）を各家の苗代にお供えして、豊作を祈る一連の流れですが・・・。

何分にも役牛で田圃を耕す時代の春先の農作業を神事として演ずることであり、特に水田耕作に当たり注意されるのは、『うと』と呼ばれる水田にできる空洞のことである。うとは田圃の床土の下に水のために土砂が流されて生じる空洞であるる。春の田鋤きに当たって、まず鍬で畔はつりを兼ねて馬子は田面を突いたり叩いたりして回り、うとを確かめる所作ごとは、当地の特殊な地形と地質を『うとさがし』の所作で表現したものです。

役牛に唐鋤を引かせて田圃を耕すこと、昭和の３０年代まではどの家でも行なわれていた作業であり、牛を使いこなして一人前と云われていました。神事としてのおん田の行事であっても馬子役は牛役の男の追い縄を使って、昔ながらの次の用語を使って馬子と牛が一体となり作業をすれば、途中で牛が反攻し暴れるハプニングも実感が増すでしょう。

――― 牛の追い方・言葉の使い方 ―――

★ 右の方へ方向を変える場 ――― オゥ、オゥ、オゥ、と軽く追い縄を引っ張る。

★ 左の方へ方向を変える場 ――― チョ、チョ、チョ、と強く追い縄で左に叩く。

★ 牛をその場に止める場合 ――― おぉ・おぉ・おぉ・と強く追い縄を引き込む。

※ おん田の牛役は追い縄を縛った角がわりの棒を肩に担いでいるが、実際の牛は角に巻かれた追い縄が鼻先の鼻木を通して、馬子の手に引き込まれているので、牛は鼻先の綱の感触と馬子の言葉を理解して行動する様に訓練されていたのです。

—— おん田の神事の流れ ——　（一般的な行事例）

サカキ（榊）切り —— 当番班が早乙女の早苗として、早稲と晩稲用に２束を準備。

早乙女　———　小学生を中心に１２名、

役者二人　———　馬子と牛に扮する男性は当番区で選出、

㊀　畔はつりの場 ——— ネジリ鉢巻きに腰蓑をつけて、キセルの煙草入れをぶら下げ、木鍬を担いだ馬子役が神前の石段を駈けおりて、境内を棚田とみなして畔はつりを真似て鍬を振り回す。

早乙女役の子供達が、「こっちに穴（うと）がある」、「そっちにも穴や」と馬子役に教えてまぜかえす。

馬子役はあちこちと子供の後を追ってうとの補修をするが、『うとが多いし、今年の畔は日和り続きで堅うて、かとうて、ああえらい、えらい。ああしんど』等と言って観衆を笑わす。

㊁　荒おこしの場 ——— 次に牛の面をつけた牛役にカラ鋤を引かせて、馬子役が追い縄を持って現われ、田を鋤くまねをする。うとに見立てた穴に足を取られる等の所作があったり、追い縄さばきに牛が反発して暴れ回って観衆の中に角を向けて馬子があわてる場面があったりして観衆を沸かせて荒起こしは済む。

㊂　あぜ塗りの場 ——— また、馬子役が鍬を担いで境内をまわり、畔つけまがいの所作と独り言をいって、あぁしんど！一服やと土手に座込み、煙草入れを腰から抜いてキセルの先に火をつけて旨そうに一服を吸う。

㊃　しろかきの場 ——— 今度は牛に馬鍬を引かせて、馬子役の追い縄裁きで境内を曳き回し、色々と暴れる中で代かきを終わる。

㊄　田植えの場面 ——— 苗は神前に供えお払いを受けたサカキの束である。馬子役が天秤棒で担いだ早苗を境内に降ろすと、早乙女役の子供達が地面に立てる仕草をし、早稲と晩稲の田植えをし、馬子役の発声で『今年も豊年満作だ！』と苗を振り合って参詣者に苗を配る。これで滞りなく、賑々しくおん田の行事は終了する。